

コーヒーブレイク

水彩画老人の独り言

佛崎 豊隆
Bussaki Toyotaka



1. セカンドライフへの挑戦

名村造船所で船舶電気設計者としてお世話になった後、電機メーカーで60歳までの残り15年余を終えた。引き続き同じ職場で顧問として働きながら振り返って考えると、仕事以外に何かやり残したような思いが強くなり、半年で職を辞して大阪へ帰った。この思いは何だろうと思案しているうちに、それが少しずつ形になって見えてきた。

仕事漬けや単身赴任で家族や友人にかけての迷惑や、地域との疎遠などへの償いがしたくなった。損得抜きで目一杯打ち込めるものも欲しくなった。熟慮の末、①長年培った電気技術を生かせる仕事、②地域社会との交流としてパソコン指導のボランティア活動、③趣味として絵を描くことの3本柱に絞って活動を始めた。もちろん友人との飲み会や嫁さん孝行は必須課目であることは言うまでもない。

そして、61歳から後期高齢者である現在までの3本柱への取り組みは、電気設備管理の仕事を73歳まで12年間で卒業し、現在パソコンボランティアと水彩画に集中している。ボランティアは在住の市内2カ所の教室で、高齢者にパソコン操作を教えている。教室には最高90歳までの方が、高齢者ゆえの不自由さをものともせず、パソコンを担いで通ってこられ、日々チャレンジされている。その絶えることのない情熱と真摯な姿に胸が熱くなる。僕自身が元気である限りこの感動から離れることは出来ない。

本稿主題の絵に関しては、現在趣味として風景水彩画をコツコツ描いている平凡な一老人で、会派とか賞などは全く無縁だ。それにも拘らず、昨年の伊万里名友会の懇親会席上で、同期の犬伏会長から何故か本誌コーヒーブレイクへの投稿を依頼された。彼のにこやかな皺笑顔の説得に酒の勢いもあり、ついつい首を縦に振ってしまい、原稿完成までの四苦八苦の日々へと連なってしまったのだ。

具体的な活動は、透明水彩による風景画を描いている。その絵でカレンダーを作ったり、原画の個展を開いたり、15年半飽きることのない気長な旅と絵筆の日々である。

2. 火種と動機

「絵を始めた動機は何ですか？」個展などでこの質問が多い。思い出をたどれば、心に絵の火種ができたのは中学2年の写生の授業中の事だった。秋晴れの昼下り、稲刈りが済んで乾いた田には稲架木が延々と並んでいた。僕たちは三々五々道端に腰を下ろしてデッサンをしていた。

デッサンが終わった頃、突然先生が横に来て僕の手からパレットと筆を取り上げると、「見とられ(=見ていなさい)」と言いつつパレットの上で色を混ぜ、慣れた手つきでサラサラと塗り始めた。

気付いた時は、画用紙は煌めく秋の色彩で覆われていた。一見平凡に見える風景でも、先生の目はその中に隠れた美しさを見抜き、筆は見事にそれを表現して見せてくれたのだ。

時は流れて悩ましき61歳。ある旅の途上で、絵葉書等にはない魅力的なシーンに出会った。その感動に浸ってい

るうちに、ふと中学時代の屋外スケッチを思い出し、火種として小さく潜んでいた先生の強烈な印象が、炎として燃え始めたのだと思った。このシーンの感動を絵に描いて伝えることができたなら、それは心躍る趣味となるのだと確信した。

3. 水彩画を描くには

テーマとして水彩風景画を選んだものの、描くことに対する自信は全くなかった。でも、絵の良いところは歌と違って上手下手はわからない。だが、人に共感を伝えるには相当の努力が必要だ。とは言え、努力しても必ずそのような絵が描けるとは限らないのが辛いところだ。どうしたらいいのか、相談相手がいないので自分で学び方を考え工夫と努力をするしかない。

まずは、美術館や画廊や図書館へ通って好きな絵を探し始めた。誰かが書いていた言葉「あまり有名でない画家の展示会に行き、好きな絵を探せ」を実践した。これは正解だと思う。高い金を払って著名な画家の絵を見ても、世評の価値観がすでに脳内に定着し、見るだけで満足して帰るのが通常で、感覚を磨くには程遠い。

こうしているうちに図書館で野村重存画伯の風景スケッチ教本に出会った。たった1冊だが構図は勿論、絵の情感と色合いに惚れて一日何度も見て模写を繰り返した。野村画伯は最近のテレビ番組「プレバト」に時々出演されて好評だ。2007年には画伯がNHK教育テレビ番組「趣味悠々 日帰りで楽しむ風景スケッチ」で週1回3か月間講義をされた。2010年にも同様の番組で3か月間の講座があり、欠かさずテレビにへばりついた。この講座のお蔭で、風景の着眼点と構図の捉え方、着色の技法、スケッチ用具の選定や作り方など、多岐にわたり基礎知識を得ることができた。遠くて近い大きな恩師であった。

4. いよいよ活動開始

水彩画の知識も用具も準備ができた。始めるにはかなりの勇気が必要だったが、中学生以来の屋外写生の機会は突然訪れた。

61歳の夏、愛知犬山市の京都大学霊長類研究所へ、照明器具の調査に訪れた。仕事は順調に終わったが猿の匂いが衣服につき、帰路の電車に乗る前に匂いを落とすため犬山城に立ち寄った。夏風に揺れる青葉を従えた犬山城天守が威光を放ちながらも爽やかに見下ろしていた。「これだ、この印象が俺の命だ」と瞬時に思って、スケッチとカメラで記録した。帰宅後持ち帰った資料をもとに黙々と描いた(写真1)。まずまずの出来栄だと、自己満足に浸って眠った。



写真1 犬山城天守

翌朝絵を見て愕然とした。確かに昨日は風景に感動したがそのかけらも見えない。木々に夏の色彩も勢いもなく、風の爽やかさは微塵も感じられない。城の立体感も威光堂々の力強さも無い。

しかし落ち込まないのは我が取り柄である。まず、最も大切なデッサン力が不足していることを反省した。基本は線の練習。縦線、横線、平行線、円の繰り返し練習。身の回り品の模写。混色の練習などを毎日続けた。この練習が継続できなければ先が無いと思った。休日は京都や自宅付近の風景や建物や橋など手当たり次第写生した。2年目にはデッサンで下の写真の程度までは描けるようになり、なんとか継続できるかもしれないという気がしてきた。



写真2 茨木市 椿の本陣



写真3 庭の侘助



写真4 古い空調機の制御器

自分が目指す風景画を描くには、絵葉書や旅行誌には載っていない、魅力的なシーンを見つけることから始まる。僕は車を持っていないので、公共交通機関と自転車と徒歩で探し回る。行き詰まる事もしょっちゅうだが、そのために日頃からテレビの旅番組やサスペンス番組を録画しておく、またはパソコンの旅行動画から探す。画面を早送りしながら、流れる動画の中から一瞬のキラリと光るシーンを見つける。そしてその現地を訪れ、イメージをさらに膨らませて対象に接しながら、写生やスケッチとカメラで記録する。現場現物に接しないと感動は本物ではないのだ。そして、瞬時にそんなシーンを見つけるには、常日頃どこへ行ってもそのような目で、シーンを探す眼力を養う事が必要だ。

5. 人の眼こそ鏡（カレンダーと個展）

他の人から共感を得るために、まずカレンダーを作って絵を紹介し、次に個展を開いてその原画を見て感じていただくことにした。個展についてはまだこんな未熟な絵で大丈夫かと思い悩んだが、最終的には高校の同期生が背を押してくれた。

ここからは、過去のカレンダーの絵から何点か選び、短文化したモノログを添えて紹介する。

2006年 カレンダー初年 伊万里の明星桜

伊万里にこんな立派な桜があることを友人達に知ってもらうために、以前から描くつもりだった。

伊万里駅から電車と徒歩で地図を見ながら現場に行き行って写生した。

未熟とはいえ渾身の力を込めた思い出深い作品だ。でも気張りすぎてデフォルメをやり過ぎた。



写真5 伊万里の明星桜

2007年 早春の千曲川

友人と信州を旅して千曲川に遊ぶ。左岸中腹の建物は僕らが泊まった宿だ。老夫婦二人だけの営みで、客は僕ら二人だけ。夜は川波の音を聞き、藤村の歌を詠み五木ひろしの歌を歌いながら酒を酌んだ。蠟梅が咲きはじめる小諸の早春は、肌寒くも熱かった。藤村の「千曲川旅情の歌」の早春の切なさが見えればと思いながら川の色を塗った。



写真6 早春の千曲川

屋外スケッチの恐怖：風景画は無料の景色を自由に使えるうえ、下手に描いても景色から文句は出ないなど良いこと尽くめのようだが、背後の恐怖と蚊の恐怖の二つの恐怖がある。

一人での写生に慣れていない頃、わが町を流れる安威川の岸を上流へ歩き、里山の風景を見つけた。早速、携帯椅子

を取り出してスケッチを始めた。やがて色を塗り始めた頃、妙齢のご婦人3人が6人分の賑やかさで後方からおいでになった。通り過ぎて下さいと、心中叫びながら描き続けた。やがて足音の方向が変わり僕の後ろで恐怖の静寂。背中がぞくぞくしたとたん、「まあ、素敵な絵だわあ」「絵を描くっていい趣味ねえ」「頑張ってるねえ」とにこやかにお去りになった。小さな心臓を割りそうな鼓動が何とか落ち着き、以降「必殺背後覗き」への恐怖は消えた。

「蚊」対策は屋外スケッチでは避けられない。最近のかゆみ止めや虫除け塗り薬、扇風機付き虫除け器など、優れものはたくさんあるので必ず携帯してほしい。忘れたら地獄である。

絵画教室：女房から「絵を続けるなら絵画教室に通ったら」と薦められたが、こんな歳になって先生とは言え、ああだこうだ言われたくないという気持ちが強く、のらりくらりと理由をつけて断った。

2009年 御射鹿池 奥蓼科

同期丹羽さんご推薦の御射鹿池を早朝一緒に見に行った。池は白い朝靄に包まれて、背景の白樺林の夏緑との対比が爽やかだ。暫し腰を下ろし靄の消えるのを待つ。やがて池の中央部から瞬く間に深い緑青色の水面が広がる。次第に池の周囲の靄も晴れて、なんとそこには、シャッターを構えたカメラマンの群れがあった。



写真7 御射鹿池 奥蓼科

2011年：丁度その日は絵画展覧会場に集まった名村OB達が、東北の大地震のニュースを聞いていた。名友会の小寺元会長が「明日、千葉のホキ美術館（後述）へ行く予定だが、これでは無理だなあ」と仰っておられた。僕もいつか行こうと思っていたので強く印象に残っている。その時はあれほど大きい地震だとは思えなかった。この年は絵の出来が悪く悩みまくった。数年後、親しい友人が「あの時の君の絵では、これから先どうなるのかと思った」と打ち明けられた。

2012年 深山の杜若 滋賀の平池

琵琶湖西岸の比良山中にある小さな平池に、1万本もの野生の杜若が群生していると知った。公共交通が無くJR近江今津からタクシーで30分と徒歩10分かけて取材に行った。奥深い森林の一角にぼっかりひらいた青空。その下の静かな池に鮮やかな紫色の杜若の自然群生があった。モリアオガエルの鳴き声が三々五々に始まり、やがて大合唱となりしばし沈黙。青い静寂の中でまた繰り返す。



写真8 深山の杜若 滋賀の平池

2013年 寒暁の港 石川県穴水

前夜穴水の国民宿舎へ着き、名物の冬ガキを堪能した時はみぞれ気味だったが、翌朝目覚めた時はかなりの雪が積もっていた。

宿舎から出て海沿いの道を駅に向かって帰る。空気も空も海も何も動かず、海面には艶もない。冷気は独り言を吸い込み、時も止まったような無音の世界。暫し我を忘れて見入る。



写真9 寒暁の港 石川県穴水

木の实ひろい 大阪万博公園

紅葉も過ぎて人がまばらの公園では、月桂樹の森に初冬の陽光が浅い色の葉を透かして、柔らかな光を投げかける。黄色い葉影の下では、小さな女の子と父親が熱心に月桂樹の実を拾っている。一個拾っては何か話し、また拾う。娘の幼い頃の思い出を重ねながら、暫し見とれる。

人や動物を描き入ると、絵に温かさや匂いが加わり、ほのぼのする。時には背景との大きさも対比できる。人や動物を描く練習が必要だが、風景の世界が広がったのが収穫であった。



写真10 木の实ひろい 大阪万博公園

2015年 ホキ美術館：ついに来ましたホキ美術館。衝撃だった。細密画の素晴らしさに酔った。等身大の人物画の人は生きていて今にも気だるく手を伸ばそうとしている。次から次へ見ようと、時のたつのも忘れたが、見る濃度が深く疲れた。ここは超写実画専門の日本で唯一の美術館。最近、その最高峰の野田弘志画伯が平成天皇皇后両陛下の肖像画を描き話題になった。写実や細密に興味のない方でも、ぜひホキ美術館の絵を鑑賞されることをお勧めする。

七十路秋を行く 山口県秋吉台

名友会七十路4人で萩から秋吉台をめぐる。荒涼とした秋吉台地で散策する3人は哀愁に満ちながらも逞しい背中だった。別の知人に見せるとものの見事に3人の名前を当ててくれた。人物の特徴をいささか捉えることができ始めたと思った。



写真11 七十路秋を行く 山口県秋吉台

2016年 トワイライトタイム 長崎市

小さな造船所で設計の手伝いをしていた頃の通勤帰路。インジゴとオペラ色に染まった、こんな夕焼けの船溜まりの中を歩くと、学生時代プラターズのコンサートで覚えたトワイライトタイムをついつい口ずさんでしまう。熱狂した思い出はまだ若い。



写真12 トワイライトタイム 長崎市

2017年 春のうららの 富山市松川

「花」や「荒城の月」の作曲家の滝廉太郎は、小学生の頃富山市に2年間住んでいた。多感な時期にこの松川や富山の自然で遊んだことが音楽の才能を育み、やがて沢山の素晴らしい曲を世に出したと、富山県人は考えている。なぜなら、この松川の遊覧船に滝廉太郎号と名付けるくらいなのだ。



写真13 春のうららの 富山市松川

スイレンの花咲く頃 富山県中央植物園

25ヘクタールの広大な園内中央にあるサンライトホールのレストランから池を望む風景。友人は、「ここへは何度も来て確かにこの風景は見ているが、改めて見るとなんと素晴らしい風景だ。いったい今まで私はここへ来て何を見ていたのかと思う」との感想をいただいた。



写真14 スイレンの花咲く頃 富山県中央植物園

2018年 斜面に乱舞 大阪花の文化園 (河内長野市)

2月寒風の中、植物園では山の斜面にクリスマスローズが咲いていた。正しくはヘレボルスという名だが、英国ではクリスマスの時期に咲く種類をクリスマスローズとも呼ぶらしい。可憐で種類や色も豊富な人気のある花だが、本名のヘレボルスは怖い意味を持つ名である。



写真15 斜面に乱舞 大阪花の文化園(河内長野市)

すすきの陰に思う 富山市

この年は災害が多かった。特に広島・岡山を中心とした水害は、300人にも上る死者行方不明者をもたらした。残念なのは、以前発生したと同じような状況の下で同じように被害が出たことだ。

この絵の土地の足元は、深さ2mまでは洪水で流れてきた軟らかい火山灰だ。山からの土砂と160年も格闘し、治水努力した国と富山の成果である。広島や岡山の方々の復興をここでスキを眺めるたびに願っている。



写真16 すすきの陰に思う 富山市



写真17 岡山県の夏の牛窓港

2019年 個展12回目

今年のカレンダー(花々の四季)の原画12枚と+4枚を、いつもの画廊でこの4月に展示し、遠方からも多くの方にご来場いただいた。感謝感謝である。2年続けた花風景シリーズはいったん休み、今年から「港・波止場一歌」をテーマに取り組み中だ。港は大きな空間とゆったりした時間を持ち。その中で出会いや別れが行き交い、歌も生まれる。その世界の一片を描いてみたいと思って始めた。少しでも自分に変化があれば面白いと期待もしている。その内の1枚「岡山県の夏の牛窓港」をご参考まで。

6. おわりに

16年間の趣味の絵画の乱文での報告になってしまいましたが、これから始めようかとお考えの方に、少しでもお役に立てるでしょうか。

僕のセカンドライフにおける、趣味の絵とパソコンボランティアおよび電気技術は、いずれも若年期から青年期までの間に僕の心に生まれた火種が何らかのきっかけで炎となって燃え始めたものです。そのおかげで、日々思ったことを成しても悔いなく変化あれば素直に受け入れることのできる現在のほどの良き時期は、今迄の人生の中で無かったと思えるものとなっています。それを可能にしてくれた家族はじめ先輩や友人達に限りない感謝を捧げる日々です。

また今般、12回目の個展という僕にとっての節目に、偶然ながらこの伝統ある技術誌の一角に私如きの拙文をご掲載頂いたことを、名村造船所関係各位ならびに名友会犬伏会長に深い感謝とお礼を申し上げます。皆様の益々のご繁栄とご健勝を心からお祈り申し上げます。

執筆して頂きました佛崎氏の概略の経歴についてご紹介します。

1966年	4月	株式会社名村造船所入社
1987年	4月	松下電子応用機器株式会社入社
2003年	3月	松下電子応用機器株式会社退職